

いぶき31号 平成25年8月

世界の偉人たちの「驚きの日本発見記」

第30回：ファン・オーフェルメール・フィッセル（1800～1848年）

「日本人は完全な専制主義の下に生活しており、したがって何の幸福も満足も享受していないと普通想像される。ところが私は彼ら日本人と交際してみて、まったく反対の現象を経験した。専制主義はこの国では、ただ名目だけであって実際には存在しない」

「自分たちの義務を遂行する日本人たちは、完全に自由であり独立的である。奴隷制度という言葉はまだ知られておらず、封建的奉仕という関係さえも報酬なしには行われぬ。勤勉な職人は高い尊敬を受けており、下層階級のものもほぼ満足している」

「日本には、食べ物にこと欠くほどの貧乏人は存在しない。また上級者と下級者との間の関係は丁寧で温和であり、それを見れば、一般に満足と信頼が行きわたっていることを知ることができる」

【出典：『日本風俗備考』フィッセル著、庄司三男・沼田次郎訳（東洋文庫326 平凡社）】
フィッセルは、オランダ東インド会社の一等社員として文政3年(1820年)に来日し、長崎出島のオランダ商館員として勤務した人物です。文政12年まで9年間の長きにわたり日本に滞在し、文政5年には商館長の江戸参府にも随行しています。出島での生活、日本人との交流、江戸への旅を通して、日本の幅広い分野を見聞し、オランダ帰国後の1833年に日本滞在の成果として『Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk（日本国の知識に関する寄与）』を出版しました。この書物は、西洋人の目を通して見た日本の様子が多岐にわたる内容で紹介されており、日本でも注目を集め、天文方の山路諧孝監修のもと幕末に全訳・刊行されました。

この本には、最近世界遺産に登録された富士山についての記述もあり、「日本で最も美しい山の一つは有名な富士山である。それは百年以上も昔から、火を噴き続け、1万1千ないし1万2千パブリフィート（1パブリフィート=0.3248406メートル）の高さがある。ゆるい傾斜をなしているこの巨像が、素晴らしい風景の中になだらかな裾野を消してゆく姿の美しさは、ご想像にまかせたい。六月まで富士山の頂上は常に雪に覆われている。八月は、人々が信仰にもとづき、ここに巡礼を行ない、頂上の祠の洞の中に安置されている神々を礼拝するために、登山する唯一の時期である。私がこの目で実際見たところであるが、富士の姿を描いた多くの絵や、いろいろな種類の鋳物の類、また富士山を歌い、記した多くの小説や詩が証明しているように、日本人はこの山とその周辺の美しさと肥沃さに飽くことを知らぬくらい心酔しているということも、私には十分に理解することができることなのである」と絶賛しています。（M. I）

【参考：(1)<http://www.kufs.ac.jp/toshokan/50/fise.htm>

(2)<http://www.seisaku-center.net/node/633>】

平成 25 年 10 月 30 日 転載